

「バイエル社体操・スポーツクラブにおける健康運動プログラムおよびその指導法に関する調査研究－障がい者スポーツ部門・子どもスポーツ部門・健康スポーツ部門を対象にして－」

研究代表者 松 尾 順 一
共同研究者 米 田 郁 夫、杉 田 記代子、嶋 崎 博 嗣
古 川 覚、金 子 元 彦、鈴 木 智 子

I. 調査研究の背景

文部科学省は、現在これまでの日本にはない多種目・多世代・多目的を旨とする「総合型地域スポーツクラブ」の設置を推奨しており、このようなスポーツクラブのモデルは、長い伝統を誇るドイツの体操・スポーツクラブに求めることができる。

「体操＝スポーツクラブ・バイヤー04・レバークーゼン」は、ドイツの体操・スポーツクラブの中でも会員数1万人を誇るドイツ最大級のクラブであり、地域スポーツ振興等との関連で日本でも注目を集めているクラブである。

当クラブは、これまでの日本のような単一種目型のスポーツクラブ（ソフトボールクラブ・サッカークラブ等）ではなく、14の種目別部門を有する多種目型のクラブであり、それらの諸部門の中で、「健康スポーツ部門」、「障がい者スポーツ部門」、「子どもスポーツ部門」は、ライフデザイン学部の研究・教育内容と大きく重なり、とくにそれぞれの指導理念や指導方法では参考にすべき点多く存在すると考えられる。

このような「健康スポーツ部門」、「障がい者スポーツ部門」「子どもスポーツ部門」のそれぞれのプログラムや指導法等を吸収するためには、文献・資料研究だけではなく、その実際の指導現場に赴き「生きた眼」で調査し、さらには専門的指導者に対し聞き取り調査を実施する必要があるといえよう。

II. 調査研究の目的

本研究では、「体操＝スポーツクラブ・バイヤー04・レバークーゼン」の全般的な活動理念や活動・運営状況をとらえるとともに、特に①障がい者スポーツ部門、②子どもスポーツ部門、③健康スポーツ部門に対し詳細な聞き取り調査を行い、それぞれの部門の活動理念や、プログラムの内容、指導方法、指導者の資格や特色ある施設、運営方法等を明らかにし、それらをライフデザイン学部における

研究および教育内容に融合させることにより、よりよい人材の育成に活かすことを目的とする。

Ⅲ. 調査研究の方法

平成23年9月11日から15日のかけ、また平成24年8月28日から30日にかけ、「体操＝スポーツクラブ・バイヤー04・レバークーゼン」を訪問し、健康スポーツ部門、子どもスポーツ部門、障がい者スポーツ部門における各種運動プログラムを調査し、さらにそれぞれの部門の運動指導者に対し聞き取り調査を行った。聞き取り調査に際しては、事前に質問項目を精査し、その内容を送付した上で聞き取り調査を行った。調査日時は以下の通りである。

<平成23年度>

9月12日：12時～14時（子どもスポーツ指導者、アンケ・シュトラシェウスク）

9月13日：14時～16時（健康スポーツ指導者、ペトラ・ベルト、ダッギー・マイス）

9月14日：15時～17時（障がい者スポーツ指導者、ヨルク・フリッシュマン）

9月15日：10時～11時（事務局長 アネ・ヴィンクシェン）

<平成24年度>

8月28日：15時～17時（健康スポーツ指導者、ザンドラ・フェルダー）

8月29日：10時～12時（子どもスポーツ部門、イリス・デュス）

8月29日：14時～15時（広報・スポンサー担当 ユルゲン・ローテ）

その他に、子どもスポーツ部門に所属している子どもの保護者にも、聞き取り調査を実施した。

Ⅳ. 調査研究の結果

<子どもスポーツ部門>

「子どもスポーツ部門」における体操＝スポーツクラブ・バイヤー04・レバークーゼン（TSV）の研究報告は、「子どもスポーツ部門の概要」と「指導場面の特徴と我国への援用可能性」の2点に焦点化して報告を行う。

1. 子どもスポーツ部門の概要

バイヤー社HP (<http://www.tsvbayer04.de>)、現地視察時の部門担当者インタビュー（その際の提供資料）を基に、それらを邦訳整理し子どもスポーツ部門の方針と指導体系、運営状況の現状について整理した。その結果、以下の点が明らかとなった。

1) 方針と指導体系

子どもスポーツ部門の基本方針は「競技スポーツ」と「余暇スポーツ」の両面を重視し、前者は“大衆スポーツ”から“競技スポーツ”の流れを、後者は“運動の楽しさ”から“余暇スポーツ（健康スポーツ）”の流れが想定されている。

具体的な指導体系は図1の通りである。

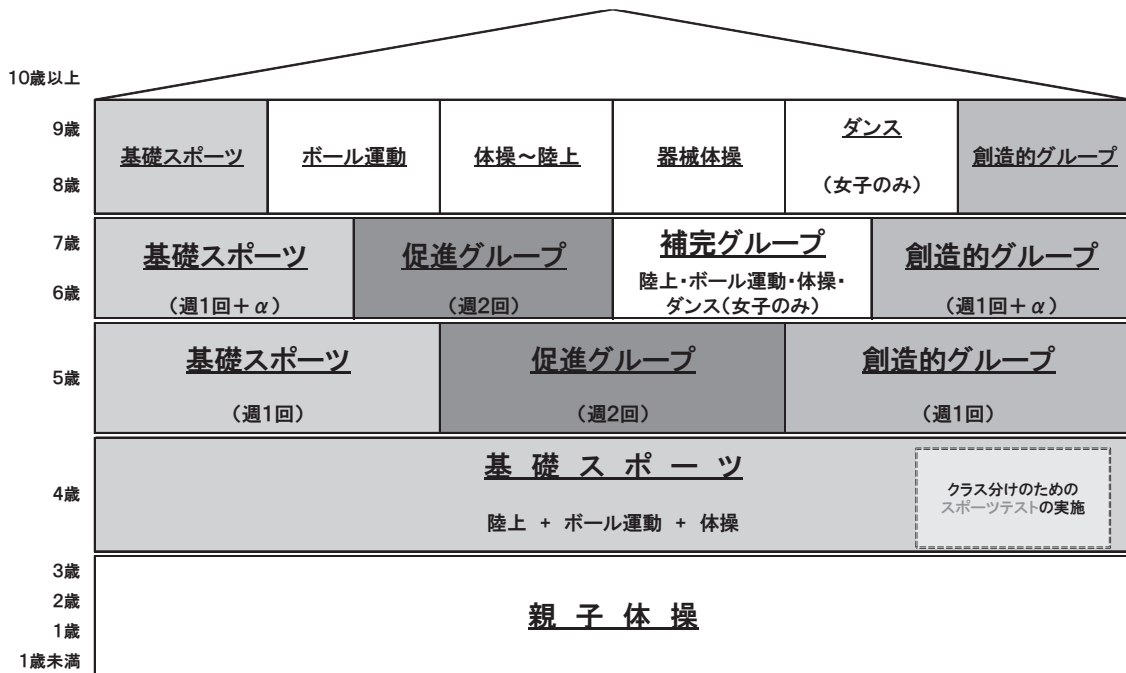


図1 子どもスポーツ部門の指導体系（構造）

3歳までの親子体操は、運動発達及び精神発達の促進を目指し、運動への親和性・生活化への入り口として位置付けられている。4歳から7歳にかけては、特化したスポーツではなく、基礎的なスポーツを子どもの身体能力に応じて提供し、多様なスポーツの体験機会の提供を通じた自己の特性理解を促している。8歳以降は、前段階の自己の特性理解に基づき、各児の自己決定に伴うスポーツ選択が導入され、スポーツの嗜好性や専門性がより深化した内容へと変容する。そして、10歳以降より、特定のスポーツに特化した内容へと移行していく。

なお、4歳児は5歳クラス（3コース）に移行する前段階として、コース分けのための「スポーツテスト」が実施される（詳細は鈴木智子論文を参照されたい）。その結果を踏まえ、上位20名（約10%）が「促進グループ」、下位20名（約10%）が「創造的グループ」、それ以外の160名は「基礎スポーツ」に進むよう提案される。

さらに、運動発達の状況把握のため、4歳から7歳かけて各年齢別に「子ども体操ワッペンテスト」が実施される（詳細は鈴木智子論文を参照されたい）。子ども体操ワッペンテストの具体的内容は、“器械体操”と“ボール運動”の2系統の動作が総合的に評価され、金・銀・銅のシールを貼り付けられるよう工夫が施されている。このカードにシールを貼付することで、子どもの技能向上意識・運動意欲を喚起させると共に、一方において、指導者側の到達度評価や指導指針を明確化させる等の意図が潜んでいると考えられる。

2) 指導者

大学（ドイツ体育大学等）で資格を取得した常勤の指導者5名、それ以外の15名の非常勤指導者、計20名の指導者によって指導が展開されている。なお、非常勤指導者は、レバークーゼン市が主催する180時間の講習を受けた者が指導に当たっている。

3) 会員の動向

子どもスポーツ部門の対象は1歳未満～9歳クラスまでが該当する。2011年9月時点で、本部門入会者は全体で約2,000名、1学年200名が在籍している。また、8歳以降を除き、各学齢に応じてクラス編成がなされ、1クラス約20名で指導が展開されている。

2. 指導場面の特徴と我国への援用可能性

2011年・2012年に視察を行い、「親子体操」「創造的グループ」「基礎スポーツ」「促進グループ」の各コースを視察した。これらの中で、2年連続で視察できた「親子体操」「創造的グループ」を取り上げ、指導の特徴を整理すると共に、我国の一般的な指導方法と対比しつつ、運動（遊び）指導を巡って援用可能な視点について考察を加える。

1) 「親子体操」の指導の特徴

3歳未満を対象にした1時間の親子体操は、前半30分を指導者主導の活動が、後半30分は参加者が自由に施設用具で遊びを展開する活動という流れで運営されていた。指導の特徴として、以下の点が注目された。

●教材の遊び方を指示し過ぎない

2011年はロープ教材、2012年はボールが使用されていたが、教材配布後、それぞれの親子が自らの発想や感覚で遊びを展開していた。指導者が遊び方を提示し、それに従うという指導展開が少ない。

●子どもの動きを拾い上げて、参加者に知らせる

子どもや保護者が行う「面白い動き」や「ユニークな動き」を周囲に知らせ、活動の広がりを作る。

●ある程度遊んだ後に、ユニークな遊び方を提案する

ロープ遊びの「スーパーマン」、ボール遊びの「いくつのボール持てるかな」など、子どもや保護者から出てこなかった遊び方を、ある程度遊んだ後に提案する（写真参照）。



●子どもへの直接的な関わりを通して、保護者と間接的にかかわる

保護者に対して「子どもと○○しましょう」という直接的な関わり方ではなく、子どもへの語り掛けや関わりから、子どもの遊び方や援助の仕方を気付かせる間接的な関わり方をする。

●ホンモノに触れさせ、身体で感じ（思考）させる

親子体操の半分の時間（30分）は、実際に器械体操で使用するホンモノの器機を使って、自由に遊ぶ。子どもは自分の興味ある器機で遊び、保護者はそれをサポートする。多様な身体感覚を味わっている子どもの姿が観察された。



2) 「創造的グループ」の指導の特徴

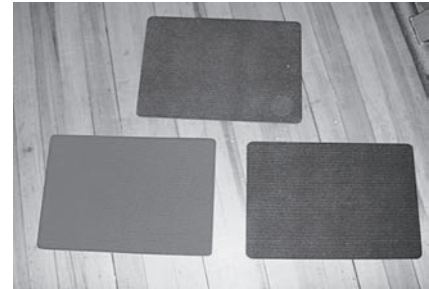
「創造的グループ」は、運動技能のぎこちない子どものグループである。2011、2012年共に年度初めに視察しており、4歳から5歳に進級した直後で、グループとしての活動を始めたばかりの段階である。指導の特徴として、以下の点が注目された。

●テーマを設定する

2011年は「工事現場」、2012年「魔法のじゅうたん」とテーマが設定され、物語性を保有させながら活動を展開している。

●ユニークな教材を使用し、多様な使い方をする

2011年はローラーボード、2012年はテピッチフリーゼン (teppich fliesen:写真) など我が国ではあまり見られない教材で活動が展開されていた。両年とも、教材を様々なものに見立て、多様な動きを引き出していた。



●発問によってイメージを拡大させる

教材を様々なモノに見立てる発問を子どもに投げかけ、共通イメージを持ちつつ活動を展開して行く。

●身体感覚を通して思考させる

2012年のテピッチフリーゼンの活動前、同教材の表と裏の特性（滑りやすさ、滑りにくさ）を裸足になって確認させる場面があった。「滑りにくい方を床に置いて活動するのは何故か」が問われ、起りうる危険を考えさせていた。2011年のローラーボードについても日常では味わいにくい身体感覚が得られる一方で、操作を誤れば衝突・転倒による怪我の危険性が意識されやすい教材ともいえる。実際にこれらの教材を自分で試し、危険性への対応力を身体感覚を通して思考させている状況が見取れた。

3) 我国への運動（遊び）指導に関わる援用可能性

日本の親子体操や運動指導を概観すると「教師主導型」の指導体制が多いように思われる。すなわち、教師が指示を出して、それに参加者が従うという形態である。しかし、TSVは指導者が、教材や場を提供し、その中から参加者が遊び方を考案、試行、発見するといった「教師触発型」の指導展開が印象的であった。参加者の活動に対する主体性を如何に引き出すのか、TSVの指導の在り方は大きなヒントを提供している。一方で、こうした主体性を引き出す関わり方は、豊富な教材はもちろんのこと、施設の充実が大きく関与している。特に、後者の実際の体操競技で使用できるホンモノの器機で遊ぶ子どもは、熱中しつつ嬉々として遊んでいる姿が印象的であった。我国で総合型地域スポーツクラブの有効性や必要性が指摘されているが、大学で保有する施設や設備をどう地域に提供・還元できるかについて、その可能性を考えることは今後の重要な課題といえる。（嶋崎博嗣、鈴木智子、杉田記代子）

<健康スポーツ部門（Freizeit-und Breitensport）>

体操＝スポーツクラブ・バイヤー04・レバークーゼンにおける「健康スポーツ部門」の実践的なメソッド、施設、運営状況、指導資格などについて聞き取り調査、資料収集および実地体験を行うこと

により、体操＝スポーツクラブ・バイヤー04・レバークーゼン「健康スポーツ部門」の理念を理解し、総合型スポーツクラブの運営に関するスキルを検討した。

1. 健康スポーツ部門の基本構造

体操＝スポーツクラブ・バイヤー04・レバークーゼンの健康スポーツ部門は以下のような4つの専門部門に分かれていた。

1. 基礎スポーツプログラム
2. 疾病予防スポーツ
3. ゴーフィット (GoFit)
4. 企業内での健康マネジメント (BGM) と企業内での健康促進 (BGF)

「基礎スポーツプログラム」は、基礎プログラム、2011年シーズンのためのインラインコース、スピード、ダンスプログラム、エアロビック、ワークアウト、ステップ、アフロダンス、ズンバ、高齢者スポーツ、などの基礎体力向上のためのコースに分類されている。この他、交代勤務者のためのスポーツ、プレルバル、インドアサイクリング（四半期ごとに申し込める）などのプログラムがある。

「病予防スポーツ」には、保険会社が疾病予防スポーツのプログラムを促進している。プログラムには、アクア、自己暗示トレーニング、ノルディックウォーキング、ヨガ、ゴースリム (GoSlim) ースポーツ栄養トレーニング、骨盤体操、ピラテス、太極拳、気功、脊椎体操、走、漸進的筋弛緩運動などがある。脊椎体操、骨盤体操、ピラテス、太極拳、気功、そしてヨガの時間には体操マットを1枚持参することになっている。これらの疾病予防プログラムは、保険会社から吟味され、相応しいと証明されている特別な質基準を充たしている。参加者が少なくとも80%定期的に参加する際、財政的な補助を受けることができる。疾病予防スポーツプログラムは、A、B、C、Dのプログラムに分かれている。Aプログラムは1月から3月まで、Bプログラムは4月から6月まで、Cプログラムは7月から9月まで、Dプログラムは10月から12月までである。それぞれのプログラムごとに、申込が行われる。費用は、時間ごとに会員3.5ユーロ、非会員7ユーロである。

「ゴーフィット (GoFit)」は、健康を目指すフィットネススタジオである。スタジオは、1,800㎡の快適な南向きの空間で、床までの大きな窓を通して施設を概観できる、快適なトレーニングの雰囲気である。また、サウナ室、日光浴室、マッサージなども利用できる。スタジオには、多種多様な近代的トレーニング機器があり、持久力、筋力、調整力、敏捷性に至るまで、様々なトレーニングプログラムが用意されており、いつでも何度でもプログラムに参加できる。腹背筋チェック、ハンディー脊柱測定器、姿勢診断、心臓スキャン、乳酸測定、あるいは全身持久力測定などの測定も受けることができる。入会時に様々な体力テストが行われ、個人的な健康や体力目標が設定され、専門のスタッフによって最良のトレーニングが提供される。ゴーフィットの付加会費は、年齢や使用によりサウナとシャワーを含め月額22から30ユーロの間である。

「企業内での健康マネジメント (BGM) と企業内での健康促進 (BGF)」は、労働条件が我々の健康に対して大いにプラスにあるいはマイナスに作用するという前提に基づき、健康でそして意欲のある従業員を確保し、企業の成功や競争力を導くために置かれている。先見の明のある企業は、従業員の健康促進を企業マネジメントの中に体系的に受け入れている。従業員の健康上の諸要求に適

切に反応しそしてそれとともに健康上の資産を強化するため、資格のあるトレーナーは、アドバイスを行い、個人的に健康を促進する処方最初の段階から確立した企業内健康マネジメントにまで企業に付きそっている。

2. 会費について

体操＝スポーツクラブ・バイヤー04・レバークーゼンは、会員の会費、保険会社からの補助金、州・市からの補助金、バイヤー社および他社からの寄付金によって運営されている。(2011年1月1日現在)

会員の会費については以下のような規定がある。

・ 満18歳までの子どもと青少年	月額 10,00 ユーロ
・ 成人のための正規会費	月額 16,00 ユーロ
・ 家族会費 ¹	月額 31,00 ユーロ
・ 年金生活者 ^{2,5} やGdB50%からの障がい者 ² のために割引会費	月額 13,00 ユーロ
・ 兵役義務者や社会奉仕義務者 ³ 、生徒・学生 ³ 、職業訓練者 ³ 、 失業者 ^{2,4} 、生活保護者 ^{2,4}	月額 12,50 ユーロ
・ 子どもと青少年の入会金	月額 16,00 ユーロ
・ 成人の入会金	月額 32,00 ユーロ
・ 家族のそして子どもをもって一人で教育している者の入会金	
合計(最高額)月額	65,00 ユーロ

1. 家族会費は、両親と18歳までのその子ども達と関係しており、そして申請は書面により行われる。子どもが、学校のあるいは職業の訓練中やあるいは兵役義務中や社会奉仕義務中であるならば、満27歳までの年齢制限の延長が可能である。相応しい有効な証明書が、申請に必要である。家族会員のための会費額は、申請の月に始まり遡っては行われない。
2. 割引会費は、会員管理所への有効な証明書の提出を通して申請する。減額された会費額は、申請の月に始まり遡っては行われない。
3. 割引される会費は、会員管理所への有効な証明書の提出を通して申請する。満27歳まで認められる。減額された会費額は、申請の月に始まり遡っては行われない。
4. 会費免除は、個々の具体的ケースのなかで承認される。このために、書面による申請がふさわしい証明書とともに行われなければならない。
5. 60歳を越える女性会員は、自動的に個人の割引会費資格を維持する。

18歳までの子供をもつ一人で教育をしている者は、その2番目のそして3番目の子供は、書面による申請で会費が免除となる。子どもが、学校のあるいは職業の訓練中や兵役義務中や社会奉仕義務中であるならば、満27歳までの年齢制限の延長が可能である。証明書は、申請に添付する。会費免除は、会員管理所への有効な証明書の提出により申請されなければならない。そして遡って行われない。会費の徴収は、もっぱら銀行徴収において半年（4月と10月）ごとに処理される。

3. 見学・実地体験

健康スポーツ部門のプログラムの中で、基礎スポーツプログラムの「ワークアウト」、「エアロビクス／ワークアウト」、「高齢者の体操」、「プレルバル」、疾病予防スポーツの「脊椎体操」の見学・実地体験を行い、ゴーフット (GoFit) のスタジオ見学などを行った。

1) ワークアウト (60分間)

最初の10数分はエアロビクスであった。インストラクターが指示するステップ名は、「ステップタッチ」「レッグカール」「グレイプバイン」「サイド・トゥ・サイド」など英語が多かった。ウォーミングアップの後、AとB 2つのコンビネーションがつくられ、最終的にはAとBをつなげて行った。Aにのみリードチェンジムーヴが入っていたため、A (右) → B (左) → A (左) → B (右) という順で行っていた。

2) エアロビクス／ワークアウト (60分間)

エアロビクスセッション (30分)、筋強化セッション (30分) という構成であった。エアロビクスセッションのコンビネーションは、それぞれ64c左右対称のA、B、Cの3ブロック構成で、最後はA (右) → B (左) → C (右) → A (左) → B (右) → C (左) とカッティングハーフで行った。その後、ダンベル (1 kgまたは2 kg) を使った6種類の筋強化セッションを行い、続いて5種類の腹筋運動を行っていた。

3) 高齢者 (60歳以上) の体操 (60分間)

参加者は15名ほどで、音楽をかけて行っていた。まず、輪になって踵で歩いたりニーアップしながら歩いた。次に、“1”は前に1歩移動、“2”は1歩左に移動、“3”は1歩右に移動、“4”は1歩後ろに移動と、1～4の数字で移動する方向を決めて、先生が数字を指示して参加者が動くという頭と体を使う運動を行った。その後、500g～1 kgのダンベルを1つずつ両手に持ち上半身の運動を行い、上半身のストレッチにつなげていた。そして、立位での下肢の筋強化を行った後、下肢のストレッチ、マットを敷いて仰臥位での筋強化を行い、最後に5分程のストレッチを仰臥位、座位、立位の順で行っていた。

4) プレルバル

3人チームで、拳でボールを打つネットスポーツである。ネットの高さは膝程度。サーブも含め、相手コートにボールを打ち込むときには、自コートにワンバウンドしてからネットを超えるように打つ。バレーボールのように、3タッチ以内で返す。タッチの間には、ワンバウンドを挟む。ネットの脇にタイマーが付いており、10分間単位で行う。ポイントを取られたチームがサーブ権を有する。ドイツ、オーストリア、アルゼンチンなどで行われているが、ドイツでは若年層が少なく、マイナースポーツになりつつある。参加者の最高齢者は81歳で70歳台が多い。週に1回は、プレーができない人も集まって食事をしているという。指導者は、若者のスポーツ離れを悲嘆していた。

5) 脊椎体操

脊椎体操とは、ドイツ流のいわゆる体幹トレーニングである。ドイツではスポーツの基本に器械体操があり、器械体操を支えるのが脊椎つまり体幹であるという考えが古くからある。従って、様々なプログラムに体幹トレーニングの要素がふんだんに含まれているが、脊椎体操では系統的に体幹のトレーニングを行っていた。ウォームアップで軽いスクワットなどを行い、ステップ台を昇降しながら

様々なプログラムを行った、その後、バーを持って上下に振りながら台の昇降を行い、大腿四頭筋のストレッチ、背筋のストレッチを行い、サイドステップを含めたクールダウンで終了した。

5. 今後の課題

体操＝スポーツクラブ・バイヤー04・レバークーゼンの健康スポーツ部門は、多種多様なプログラムを用意し、様々世代の多様なニーズに対応している。もちろん全てのプログラムを体験・見学する事は不可能であるが、本研究を通して触れることができたプログラムはほんの僅かである。健康スポーツ部門の内容をより深く理解するためには、より多くのプログラムの情報を得ることが必要あるため、今後は研究活動を通して得られた人脈を利用し、指導者や会員に連絡を取りプログラム内容を把握してゆくなどの追加調査が必要になるとと思われる。(古川覚 鈴木智子 松尾順一)

<障がい者スポーツ (Behindertensport) 部門>

1. 全体的構造および、指導体系

体操＝スポーツクラブ・バイヤー04・レバークーゼンの障がい者スポーツ部門は、1950年に330名の会員とともに開設された。障がいを抱える会員からの働きかけで、戦傷者への支援を念頭に開設したものである。スポーツクラブが持つ障がい者スポーツ部門としてはドイツ最大であり、障害者スポーツの競技部門においても最高の成績を上げているスポーツクラブの一つである。これまでにパラリンピック、世界選手権および、ヨーロッパ選手権等国際的競技会で多くの優秀な成績を収めてきている。体操＝スポーツクラブ・バイヤー04・レバークーゼンの障がい者スポーツは、次の3つのカテゴリーを柱に構成されている。すなわち、①競技スポーツ、②大衆スポーツ、③リハビリテーションスポーツであり、そのほかに、「その他のスポーツプログラム」としていくつかのプログラムが準備されている。障がい者スポーツ部門全体としては競技スポーツを中心に活動されている印象を受けるが、楽しみとしてスポーツに取り組むことや、リハビリテーションとしてのスポーツも充実している。参加者の会費については、一般よりも3ユーロ安い13ユーロ/月である。

なお、ドイツにおける障がい者スポーツの所管については、競技スポーツおよび、大衆スポーツがドイツ障害者スポーツ連盟、リハビリテーションスポーツが各州のスポーツ連盟となっている。

① 競技スポーツ

パラリンピック、世界選手権および、ヨーロッパ選手権等国際的競技会において優秀な成績を収めることを目的として活動しており、特にパラリンピック採用種目である陸上競技および、水泳は充実している。体操＝スポーツクラブ・バイヤー04・レバークーゼンでは、いま現在トップレベルにいる競技者を支援するとともに、各スポーツ種目でトップレベルの競技者を継続的に輩出できるよう「後継者養成のためのプログラム」に力を入れていることが特徴的である。いわゆる健常者の行うスポーツとは異なり、そもそもの絶対数が必ずしも多くない障がい者スポーツ部門において、「後継者養成のためのプログラム」を配置できるということ自体が、このスポーツクラブの障がい者スポーツ部門がいかに活発であるかを示していると理解できるだろう。

体操＝スポーツクラブ・バイヤー04・レバークーゼンの障がい者スポーツ部門では有望な選手に対

して、「トレーニング環境の支援」「キャリア面の支援」「後継者養成コースの子どもに対する学習環境の支援」を行っている。一方で、選手に対しては年1回のメディカルチェックを義務づけており、これはトレーニング実施に伴う安全確保のためと、国際大会派遣の多くで必要となる診断書提出に備える両方の意味合いから実施されているものと推察された。障がい者競技者の日常のトレーニングについては、水泳を除いて競技者と非競技者が一緒に活動することはない。その大きな理由として、トレーナーが競技者と非競技者を同時に指導することは不可能であることが挙げられていた。

② 大衆スポーツ

障がい者スポーツ部門における競技スポーツとリハビリテーションスポーツの中間に位置するカテゴリーと考えられる。指導者は基本的に競技スポーツ部門で活動する競技者に対する指導を中心に据えていることや、フットボールテニスの愛好者らが指導者を置かずに仲間同士で活動していた様子から勘案すると、クラブが指定しているクラブ保有の各スポーツ施設の解放時間を利用して、会員が比較的自由に活動するような形態が多いと推察された。

③ リハビリテーションスポーツ

リハビリテーションスポーツについては、病院での手術を終え、さらに医療機関でのリハビリテーションを終えた人たちが次のステップとして活用できるように展開されているプログラムである。参加者は医師の運動処方に基づいて取り組んでいる。医療機関でのリハビリテーションを経てこのプログラムに参加する場合、一定の期間について保険が適用されることとなっている。こうした社会の仕組みが存在することから考えると、国や地域が、障がい者の社会復帰ならびに、リハビリテーションを推進するに当たっては、各スポーツクラブのプログラムを有効活用していこうとする姿勢がうかがえる。また、たとえば、心臓疾患を対象としたスポーツプログラムでは、医師を帯同してプログラムが進められており、緊急事態に対する備えも手当てされていた。

2. 指導者について

体操＝スポーツクラブ・バイヤー04・レバークーゼンにおける「障がい者スポーツ部門」の専任指導者（コーチ）は1名だけであった。以下が競技スポーツ、大衆スポーツおよび、リハビリテーションスポーツそれぞれにかかわる指導者の概要である。主に資格との関わりからまとめた。

競技スポーツの指導者については、障がい者スポーツに関する特別な資格は必要ないが、専門とする各スポーツ種目の指導者資格を持っていることが必要となる。各スポーツ種目に関わる指導者資格を取得する過程において、一部、障がい者スポーツに関わる講習内容が含まれている。

リハビリテーションスポーツについては、競技スポーツや大衆スポーツに比べると、参加者に対するさまざまな配慮が必要となる。このため、担当する指導者は対象となる障がい者の障がい特性および、スポーツプログラムに精通していることが求められ、その適格性を証明できる資格を持つことが必要となる。なお、各種のスポーツ指導者資格を取得するのに際しては、スポーツに関わる理論のみでなく実技も修める必要があることから、障がい者が指導者資格を取得して指導者として活動するケースは少ないようである。

3. 他機関との連携について

① 病院との連携

体操＝スポーツクラブ・バイヤー04・レバークーゼンは義足開発で有名なミュンスター大学病院との連携がある。スポーツクラブのスタッフがミュンスター大学病院へ行って講演を行うこともある。車椅子、義肢、装具、歩行器および、杖などの用具については、原則的にリハビリテーション専門の病院で使用者に対する助言や用器具の調整を行っており、スポーツクラブのスタッフが用器具に対する助言を行うことはない。

② 福祉機会メーカーとの連携

体操＝スポーツクラブ・バイヤー04・レバークーゼンは、1992年より主に義足を製造している福祉機械メーカー オットーボック社と連携している。トップレベルの競技者の中にはオットーボック社と用具契約しているケースもある。また、競技者向けでなく一般の人にも使用できる用器具の開発を、オットーボック社と共同で進めている。

4. 指導場面の実際例

① 肺疾患の人のためのスポーツ（90分間）

喘息や慢性的気管支炎をもつ人々のために、2007年の10月以来、リハビリテーションスポーツの枠内でのスポーツセラピーのための一つの新しいプログラムがTSVバイヤー04に存在している。女性呼吸臨床医のCarola Adamsの指導の下やそしてレバークーゼンの肺専門医Dr. Mülleneisen やDr. Thönesの協力のもと、肺疾患者はスポーツを行っている。“心配なく、空気を必要とする患者は、マラソン走者になってはならない。我々が述べているように、スポーツは苦しみに合わせるべきである”、とDr. Mülleneisenは説明している。



② 心臓疾患の人のためのスポーツ（90分間）

プログラムの全体は約90分であり、ウォーミングアップ10分、サーキットトレーニングを中心とした内容55分、ゲーム15分および、クーリングダウン10分という構成であった。この日の参加者は合計8名であり、その内訳は男性5名、女性3名であった。参加者全員が定期的に医療機関での検査を受けていた人たちで、手術後間もない人から、手術後時間を経て経過が良好な人までさまざまであった。参加者全員分のファイル（カルテのようなもの）が準備されており、プログラム開催中は指導者がいつでも確認できるようになっていた。指導者は男性インストラクター1名（ドイツ体育大学学生、指導のための資格を保有しているとのこと）であり、ほかに医師が1名帯同していた。このプログラムの参加者は運動に伴う一定のリス



クを有するため、医師が帯同することが義務づけられている。ただし、心臓循環器系を専門とする医師である必要はなく、この医師も専門ではないとのことであった。

5. 今後の課題

体操＝スポーツクラブ・バイヤー04・レバークーゼンの障がい者スポーツ部門が戦傷者への支援を契機として設立されたこと、身体障がい者を対象としたプログラムの充実を図ってきたことや、パラリンピック種目に特化した強化策を講じてきたことなどが確認され、障がい者スポーツにおける世界の潮流に準じたものであったことが理解された。しかし、近年ではバイヤー社の働きかけもあって、知的障害者および、精神障害者に対するプログラムも提供されるようになってきたようである。今後はこれらのプログラムに関わる理念や実際についての調査を進めることによって、体操＝スポーツクラブ・バイヤー04・レバークーゼンの障がい者スポーツ部門の全体構造を、より明確なものとすることができるだろう。(金子元彦、米田郁夫)